

2017 年度地域生活研究所一般研究助成 助成論文②

子育て中の女性アーティストに関する実態調査

高橋 律子*

1. はじめに：子育て中の女性アーティストに関する実態調査にあたって

2017 年「NPO ひいなアクション」を子育てしながら仕事をする女性 5 名で立ち上げた。NPO ひいなアクションは、「地域と女性とアート」をキーワードに主に金沢市内で活動する団体で、子育て中の女性アーティストの支援を第一の目的としている。生活費を稼ぐための仕事もしながら、子育てもしている女性アーティストは、子どもが寝た夜中や早朝に作品制作を行っている。また遠方での展覧会にも参加しづらく、作品発表の機会を逃しがちになっている。そうした女性アーティストの存在を明らかにし、支援することが NPO を設立した主な目的である。

NPO の設立は筆者自身の育児経験が大きなきっかけとなっている。子育てと仕事に追われ、細切れの時間しかない中で、遠方への実地調査や集中して文献調査を行うことが困難になった。そして、子育て中のアーティストの友人たちと話をすることによって、苦しい制作環境を知ることになった。アーティストとしての仕事で収入を得ることが難しいため、作品制作は子育てとお金を稼ぐための仕事のさらに後回しになってしまうこと、

制作時間は夜中か早朝になるため、自宅で制作するしかないこと、展覧会の打ち合わせや設営時に子どもをどうするか、など、その課題は私自身の課題よりもさらに複雑なものであった。また美術系大学を卒業しながらも、多くの女性たちが、子育てに追われる中、制作活動を中断してしまっていることも知った。

アーティストは地域の文化資源である。地域で活動の場を創出し、アーティストが自活できる環境を生み出すことができれば、アーティストのクリエイションが広がるだけでなく、地域が文化的に豊かになり、創造的な子育て環境を地域に生み出すことができる。子育てでアーティスト活動を中断しなくてもよいように、また才能あるアーティストが存分にその才能を生かすことができるように、支援していきたいと考えた。活動としてはそれなりの成果もあったが、実際の支援につなげようとするデータがないことで説得力が欠けてしまうことがわかってきた。アーティストが身の回りにはそれほど多くない。つまり、具体的に困っているアーティストのイメージがない中で、そのライフスタイルまで想像することは至難なことであった。まずは子

* たかはし りつこ NPO ひいなアクション代表。

育て中のアーティストの存在を知ってもらうことから始めてみたいと思う。そのための実態調査である。女性が、子育てしながら仕事をするのが当たり前になってきている中で、芸術作品を制作するという仕事の特殊性をどう取り扱っていくか。それは文化を享受する私たちの課題でもある。

2. 調査方法の選定

(1) 対象者の選定

「子育て中の女性アーティストに関する実態調査」を実施するにあたって、まずは調査対象者を選定するのに難行した。「子育て中のアーティスト」という調査対象者について、2つの課題があった。その1つが「子育て中」とした時の子どもの年齢、2つ目が「アーティスト」とは誰を指すのか、ということである。

まず1つ目の課題である子どもの年齢の設定であるが、社会的な支援の体制は、就学前の子どもの養育に対して最も手厚い。何人かに下調査した結果、子育てに関わる実感は中学生になっても継続し、学校生活や安全面、習い事の送迎や食事の準備など、幼少期とは異なる「子育て」がある。小学校までと区切ることも検討したが、今回の調査は、数量的データよりも多様な実態を引き出すことを第一の目的とするため、あえて子どもの年

齢を区切ることはしなかった。また、子育ての忙しさから離れた人の方が、課題がより具体的に見えてくる可能性も視野に入れた。

2つ目の「アーティスト」とは誰を指すのかという課題も困難を極めた。アーティストの場合、作家活動で収入を得て暮らしている人はごくわずかである。他に仕事を持ちながら、あるいは配偶者の収入で生活費はまかないながら、創作活動をしているのが一般的だと言える。「アーティスト」とは基本的に自称である。

当初、美術大学の出身者を対象とすることで、アーティストであるという対象者の前提をクリアできるのではないかと考えた。しかし、調査対象と考えていた金沢美術工芸大学の「同窓会名簿」を確認したところ¹⁾、ファインアート専攻の卒業生の現在の職業欄に記入があるのは約30%、画家や作家といった「アーティスト」に該当する記述は全体の約5%だった²⁾。高名な作家でも未記入のケースも少なくなかったことから、この結果は金沢美術工芸大学出身のアーティストの数を明らかにするものでは決してない。だが、「アーティスト」という職業意識をどの程度の人が持っているかについて示した数値だとは言えるだろう。

いろいろな事情から作品制作をやめてしまう人がいる。中でも、結婚や育児が

- 1) 2012年度に発行された『金沢美術工芸大学 同窓会名簿』を参照し、ファインアート系（日本画、油画、彫刻、工芸）の卒業生のうち、逝去者をのぞいた学生3821名を分析した。ファインアート系の職業欄記入者30%に対し、デザイン系の学生の職業欄記入者は40%を超えた。職業意識という点においてもファインアートの方が低いことが調査から判明した。
- 2) 画家、日本画家、洋画家、彫刻家、自営陶芸、美術家など専門性を示した肩書きを書いた者、作家名を記した者を「アーティスト」として解釈した。職業欄にアーティストと記載した者はいなかったが、多様な芸術活動を示す用語として、本稿では「アーティスト」を用いることにする。

制作を断念することにつながっている。残念ながら今回の調査では数値化できなかったが、制作したいが作れない状況にある彼女たちに「アーティスト」として質問を投げかけることは、心理的な負担をかけることになる。調査の目的は創作活動を支援することであって、プレッシャーをかける要素は排除したいと考えた。

また、アートが常に作品の評価をはらんでいることも対象者の選別を難しくした。誰がアーティストかを考えるときに、作品のクオリティの問題を持ち込むことは避けなかった。作品のクオリティによって、それが果たしてアートなのかどうか、という議論は常に起こりうることである。「アーティスト」は基本的に「自称」である、という原則に立ち返り、特定の対象者を調査側が恣意的に選ぶのではなく、受け手の側が「子育て中のアーティスト」だという認識があれば対象者とするのが望ましいと最終的には判断した。そのため、インタビュー調査を予定していたが、ウェブ上で広く回答者を募る形のアンケートへと変更した。

(2) アンケートの方法

アンケート方法として、Google フォームを活用することとした。Google フォームは、Google アカウントを取得さえすれば、誰でも無料でインターネット上にアンケートフォームを作ることができるシステムで、パソコンやスマホで簡単に回答することができる。できる限り、アンケート調査を行なっているという情報を拡散したいということと、「子育て中」の忙しい女性たちが参加しやすいことか

ら、Google フォームを採用することとした。おそらく授乳中でもスマートフォンの片手操作で記入することができるシステムである。

また、アンケートの周知には、Facebook などの SNS を活用した。「NPO ひいなアクション」の Facebook でアンケートへの回答を募る記事を掲載したところ、27 件のシェア数となった。アンケートフォームのリンクがシェアされることは大きなメリットだと感じた。リーチ数は約 2,600 件となり、シェア数と合わせてどちらの数値も活動を開始して以来の最高値であった。他、東京大学の卒業生で子育てをしている女性たちの Facebook グループ「東大ママ門」での投稿、個別でのメール依頼なども地道に行い、そこからの口コミなども回答に繋がった。該当者の絶対数がそれほど大きくない中で、11 日間の調査期間に 53 件の回答を得たことは、それなりの成果があったと見ている。

3. アンケート調査の概要

アンケート調査は 2018 年 12 月 14 日から 24 日にまでの 11 日間実施した。回答数は 53 件である。記述式が多くなったのは、個別の状況の聞き取りを重視したいと考えたからである。インタビュー調査に近い形で、詳細な実態がわかるアンケートとすることを心がけた。共同研究者で、調査該当者でもあるモンデンエミコと項目設定について検討し、以下の項目とした。

- | | |
|----|-----------------------------------------------|
| Q1 | 何県にお住まいですか？海外の方は国名をお書きください。 |
| Q2 | 年齢を教えてください。(選択式)
20 代 / 30 代 / 40 代 / 50 代 |

Q3	お子さんは何人ですか？（選択式） 1人／2人／3人／4人以上
Q4	いちばん小さいお子さんの年齢は何歳ですか。（選択式）0～3歳／4～6歳（未就学児）／小学校1～3年生／小学校4～6年生／中学生以上
Q5	美術系大学のご出身ですか？（在学中を含む）（選択式）はい／いいえ
Q6	仕事をされている方は、可能な範囲でお仕事の内容を教えてください。（記述式）
Q7	出産後、作品制作の環境は変わりましたか？（記述式）
Q8	作品制作時間はどう捻出していますか？（記述式）
Q9	あなたが持っている時間を100とすると母親としての時間、仕事の時間、作家としての時間の配分はどうなりますか？（記述式）
Q10	居住されている地域で、作家として活動できる環境はありますか？（記述式）
Q11	作品制作を継続するためには何が必要だと考えますか？特に優先順位の高いと思うものを2つ選択してください。（選択式）家族の協力／ひとりの時間／収入／美術に関する仕事への就労／仲間の存在／その他
Q12	子どもの手が離れたら、どのように活動をしていきたいですか？（記述式）
Q13	子育て中の女性アーティストの課題について、そのほか気になっていることなど、自由にお書きください。（記述式）

4. アンケート結果の分析

「子育て中のアーティスト」といって

も、個別の事情でその課題も随分異なってくる。創作活動のジャンルの違いや、預けられる親が近くにいるかどうかによっても大きく変わる。その実態が明らかになるアンケート結果であった。また回答者の中にはシングルマザーもいた。できるだけそうした個別の課題が見えてくるようアンケートの回答については資料編³⁾にて回答者ごとにまとめたが、字数の限られる本稿では、回答の傾向について分析するに留めることとする。

(1) 回答者について

Q1から6の項目は、回答者層を掴むための設問である。Q1の居住地を問う設問では、13の都道府県と、海外からもドイツ、フランス、イタリアの3人の回答を得ることができた。東京都が最も多く18人、筆者の所属するNPOひいなアクションの活動地域である石川県が9人、近隣の富山県が7人だった。インターネットの特性を生かし、短期間に幅広い地域の方を知っていただくことができたが、口コミで広めたためその地域には偏りが出てしまった。アンケートの周知期間をもっと長く設定し、大規模なサイトで告知を行うなど、検討の余地はあったかと思うが、北陸地域に限定されるのではないかと予想以上に、幅広い地域の方から回答を得ることができた。東京が多くなったのは、アーティストの人口の多さに比例すると思われる。

年齢別では30代が28人（Q2、53%）[図1]で、子ども1人が30人（Q3、57%）[図2]、その子どもがまだ0歳か

3) アンケートの結果をまとめた資料編は地域生活研究所ウェブサイトに掲載されている（末尾参照）。

図1 回答者の年齢

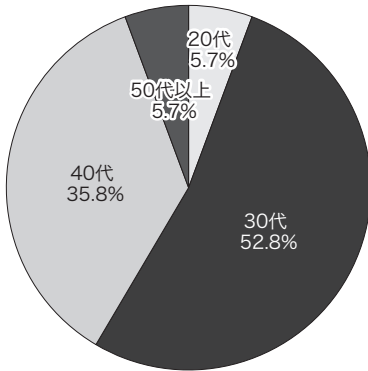
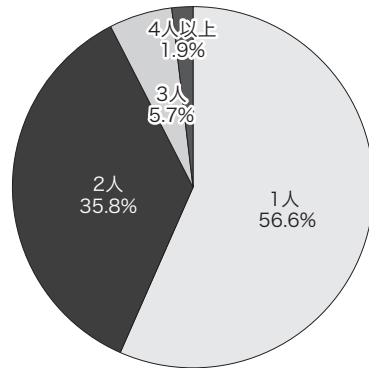


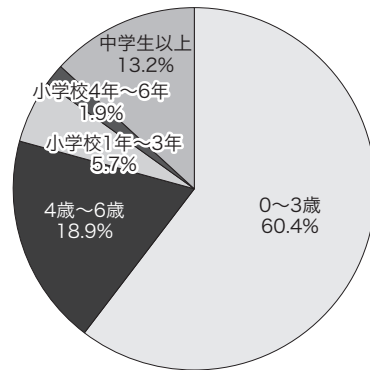
図2 回答者の子どもの人数



ら3歳が32人 (Q4、60%) [図3] といずれも半数を超えていた。情報の周知をSNSメインで行なったことも30代が多かった理由の一つであるが、0歳から3歳の子どもを子育て中の人の回答が多かったという事実から、子育て中の30代が、最も切実に課題を抱えている層だと推定することはできるだろう。

本アンケートが「美術系」をターゲットに設問を作成してしまった問題点も露呈した。回答者を募る過程で、舞台系の方から、アンケートに協力したいが回答してよいかと質問があった。設問が美術系に偏っており、それ以外の「アーティスト」の方には答えにくい設問がいくつもあった。指摘の通りで、アンケートを開始する前は、人脈の範囲から回答者としての「アーティスト」は美術系しか想定できていなかった。そのため、Q6についても、アーティストとしてのジャンルを問う設問というよりは、日中の仕事についてたずねる設問であった。中途半端な設問となり、回答はそれぞれの解釈に

図3 回答者の子どもの年齢 (下の子ども)



よって異なってしまったが、結果として、多様なジャンルのアーティストの方に回答していただけたことをこの設問から知ることができた。例えば、劇作家やメイクアップアーティスト、声楽家、書道家、映画監督、食に関するアーティストユニット、テキスタイルデザイン、アニメーション制作、身体パフォーマンスなど、想像を超える多様なジャンルの人に回答いただいた。作品のジャンルによつ

て制作環境も大きく異なるが、子育てをしながら多彩な分野で女性たちが活動をしているという事実は嬉しい事実でもあった。一方、お金を稼ぐための仕事と解釈した人の回答には、教員や美術教室などアーティスト活動と結びつく業種と、事務、医療系、専業主婦、掃除のパート、カフェ経営など、活動とは関係がおそらくない業種が挙げられた。

Q5の美術系大学を出ているかどうかは、そのジャンルでの専門性を確認し、また仕事との関連を知ろうとした設問であったが、美術系以外のアーティストが多かったために、この設問はあまり意味のないものとなってしまった。それでも回答者のうち35人(66%)が美術系大学出身者であったということから、アーティストとなる起点として美術系大学が機能していることは事実だと言えるだろう。

(2) 制作環境の変化

Q7は出産後の制作環境の変化についての設問である。回答は、「変わった」と答えた人が45人(85%)、「変わらない」4人(7%)、出産後に創作活動を開始した人が3人(6%)、無回答1人となった。全体の8割強の人が、制作環境が変化したと答えている。

変化の内容については、主に①制作場所の変化、②経済的な問題、③アーティストとしての仕事の減少、の3つにまとめることができる。①制作場所の変化については、例えば、自宅を制作場所に変更したという回答が6件あった。子どもから目を離さない状態で制作継続していくためにそれぞれ対処しているという結

果だろう。「家の中でできる作業を、なるべく家族の見える場所でするようにしました。作業を途中で止められるように簡単に片付けられるようにして、また時間ができたときにすぐに作業に向かえるようにしまいこまずに目につく場所に途中経過のものを置いておくなどの工夫をしています。」という意見は、リアルなアーティストの制作実態だろう。

また「海外や地方のレジデンスにいけなくなった」という回答もあった。これは、子育てが終わった後にやりたいことを問うQ12とも関連する。自宅で制作することで活動を何とか継続し、遠方での活動は諦めているアーティストの実態が見えてくる。②経済的な問題は、作品制作を継続する上でかなり切実である。収入を伴わない創作活動が生活の後回しになる状況も見えてくる。「家事育児がすぐにお金にならないので、お金にならない作家活動は生活のための仕事のあとになり、いつでも優先順位は最下位になった」「絵の具が買えず絵を描くのはやめました」という意見は、家庭を持つことによつて、収入のないことが制作を継続できない要因になっているケースだろう。

③については、このアンケートでは書ききれない、やりきれない思いの出来事があったことが想像された。「契約のあった演者としてのお仕事は1つを除いて全てお断りせざるを得なくなりました。」「出産直後は毎回一年ほど、作品は作る事が出来ないで、仕事が激減した」など、特に舞台系の仕事の場合、出産によつて制作継続が一時的に途絶えてしまうことと、そこから通常のペースに戻すことの難しさがあることがわかった。

一方、出産後に創作活動を開始した人が3人いた。出産によって、育児休暇や仕事を辞めるなど逆に時間ができるケースもある。それぞれの回答の全体を見てみると、出産後に活動を始めた人はネガティブなコメントが少なく、環境を比較的肯定的に捉えることができているように感じた。

(3) 制作時間の捻出

Q8は制作時間の捻出についての設問である。

回答は以下のように分類することができた。

- ① 保育園や学校に預ける (20)
- ② 睡眠時間を削る (7) 子どもが寝てから (21) 早朝 (9) 合計 (37)
- ③ 実家、義母に預ける (8)
- ④ 夫に預ける／夫と交代 (7)
- ⑤ 仕事の合間 (3)
- ⑥ 捻出できない (4)
- ⑦ 仕事が休みの日 (2)

基本的に子どもいる時間には制作できない。そのため、実質的に子どもがいない時間をどう作るか、ということが制作時間を捻出する方法となる。①保育園に預けることによって制作時間を確保することができるが、就労証明書が必要な保育園の入園条件があるので、収入のない作家活動ということで保育園に預けることは実はそう簡単なことでもない。「個人事業主だと行政のサービスはほぼ受けられないので、両親はじめ家族の助けによって成立している」「子供を預ける保育園が、自営業では点数が低く確保できない。3歳からの保育園に預ける為に、2歳から小規

模保育園に入れ(点数の為)、外勤も始めた(点数の為)。全ては点数の為に動かねばならない」といったコメントは、現実の厳しさを表している。海外と比較し、作家活動が「職業」として認められにくいことについて言及した意見もあった。Q13のその他の回答ではあるが、「美術制作や活動は遊びと思われる事が多く(実際に言われる)現在アーティスト自身が自信をもって時間を作り、活動しづらいという事がある。母親業をする人が自信をもって社会に参加しているという実感を持てれば、制作に割く時間を作り易いのではないかと思っている」「日本では芸術が母親の仕事として受け止められにくいですね。世間の理解と横の繋がりと、両方広がってほしいと願っています」といった意見があった。日本における「芸術家」「アーティスト」という職業への意識を高めることも重要である。

②37人の人が、睡眠時間を削って制作していた。子どもが寝た後が21件と早朝9件だった。早朝とは例えば、「21時に寝て2時に起きる」「こどもが寝ている時間を制作時間にしています。寝かしつけると同時に疲れてしまいそのまま眠ってしまうことも多いので、早起き(4時、5時)して制作することが多い」ということである。「子どもを寝かしつける」ことも、子育ての仕事の一つである。「寝かしつけ」は、寝るつもりでないのに寝てしまい予定が狂ってしまうことはままある。そういう意味でまとまった制作時間の確保が絶対的に必要なアーティストにとって、負荷のかかる育児の1つである。

③④休日に夫と子どもの担当を交代し

ながらや、親に預かってもらうケースも多い。親が近くに住んでいる場合とない場合とでは、状況の深刻さは全く異なる。シングルならば尚更だろう。「実母に子育てを手伝ってもらうため、県外から来てもらい、住んでもらっています。」という例もあった。仕事の休日が週末の場合、子どもの保育園や学校も休みである。その貴重な休みをどう乗り切るかも難しい。

⑤「仕事の合間」というのもリアルな回答である。作家活動と重なる創作活動の場合にはあり得る。もしくは、日中の仕事の昼休みなどを利用しているケースもあるだろう。自由記述でありながら、⑥「捻出できない」という回答が4件あったことも課題の切実さを示すデータである。

(4) 生活における創作活動の比重

活動時間の配分をたずねたQ9では、アーティストという自覚がありながら、その比重は5～10とした人が18人で、

全体の34%にのぼった。創作活動の時間が取れない実態を表した結果である。展覧会や公演前でその比重は変わってくる。

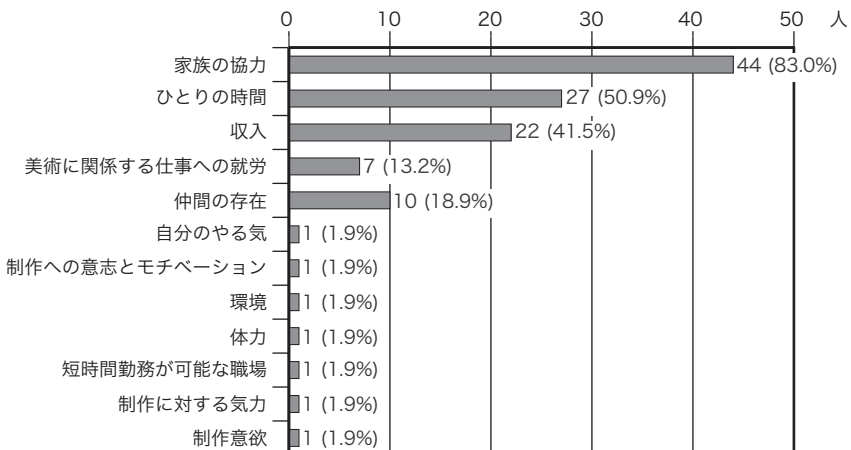
(5) 地域における活動の場

Q10では、地域に活動の場があることの有無と、地域で活動したいと感じているかどうかを把握したいと考えた。活動の場が多かれ少なかれあるという回答は40件で、74%の人が居住地域に活動の場があるとし、そして「あるけれど少ない」「自分次第」などの回答に、地域に活動の場があることのメリットを感じていることがうかがえた。

(6) 作品制作に必要な条件

Q11では、作品制作の継続に具体的に必要な条件を選択してもらった。どれも必要という意見が多数ある中、2つに絞り込んでもらったのは、支援にあたっての優先順位をつける上での参考資料にな

図4 創作活動を継続するために必要な条件(2つ)



ると考えたからだ。圧倒的に多かったのは44件（83%）の「家族の協力」である。圧倒的に多い数値の逆を考えれば、現状において家族の協力がいない場合、制作を継続することが極めて困難ということがわかる。親が近くにいる人ほど制作しやすく、シングルで近くに身内がいない場合、制作環境はかなり厳しい。

また「ひとりの時間」も27件（51%）あった。たとえ仕事が休みでも、子どもたちの保育園や学校も休みとなる週末は「ひとりの時間」でないため制作は難しい。「収入」が22件（42%）、「仲間の存在」10件（19%）、美術に関する仕事への就労が7件（13%）だった。その他としてあげられたのが、「モチベーション」「やる気」といった本人の意識に関する条件だった。「制作したい」という強い思いがあつてこそ、様々な困難も乗り越えられるということなのだろう。[図4]

(7) 子育て後の活動の展開について

Q12で、子育て後、制作に没頭したいという意見も複数あつたが、それ以上に目立ったのは、遠方で活動がしたいというコメントで9件の類似回答があつた。特に「海外」「レジデンス」に対する渴望は、子どもがいると切実である。それぞれの地域で活動の場を見つけながら、もっと幅広く展開していきたいという声は少なくない。

(8) その他

Q13は自由に思うことを書いてもらえばという程度で、記入する人はあまりいないだろうと考えていた項目である。ところが、43人（81%）もの人が「その他」の欄に記述してくれる結果となつた。大

きな特徴としては、「子育て中のアーティスト」の課題をさらに指摘した回答が目立った。特に子育てのときの感覚と作品制作をするときの感覚が異なり、すぐに切り替えができないことの課題を指摘した人が複数いた。「制作時間が少ないというのはもちろん問題ですが、それよりも主婦である感覚と作家である感覚が全然違う発想の中にあり、気持ちのコントロールが上手く出来ない事が一番辛いと思います。スイッチのオン、オフが上手く出来れば制作もスムーズに出来て短い時間でも作家活動は可能ですが、子供は待ってくれない、わがままを言う、小学生になれば児童クラブや習い事で更に忙しくなり、とにかく時間が奪われていきます。その中で作家として気持ちを高め続けるのは難しいです」「仕事に取り組むための戦うホルモンと、子供を育てるホルモンの真逆のもので、女性の身体の中でそのせめぎ合いが体調や精神にきたず影響を、科学的にもっと研究して広めてほしいと思います。スイッチの切り替わり時期に、体内の変化を実際に体験しました。」「子育てというものはどうしても生活という現実がつきまとうものであり、制作活動をする際の思考とは離れてしまうことになり、たとえ時間ができたとしてみもちの切り替えが難しい時がありました」など、具体的に貴重な意見を得た。精神面でバランスを取ることの難しさが、アーティストとしての活動に影響するという課題が浮き彫りになった。

子育てが創作活動に与えるプラスの側面について書いた人もいた。「妊娠出産育児の経験は、表現をする者にとって大きな影響を与えるものだと感じています」

「子供がいることで時間的に制限され、制作の時間が限られることはありますが、子供がいるからこそ感じられることや、気づくこと、生まれるモチベーションなども多くあります」「タスクが多いのは難点でもあるが、タスクを多くすることによって色々なコミュニティと交わり役目が増えるので社会的な制作や活動も実体験に基づいて行える利点」というように、子育ての経験を生かせることもまた事実なのだろう。

「子育て中」であることを、あえて問題として取り上げることへの疑問の声もあった。「子育て中の女性アーティストは一体何か大変なのか？ 子育て中の男性アーティストもいるけれど、彼らは大変ではないのか？ 自分が『アーティストだから』子育てが大変だと思った事はないし、子育てが大変だからアーティスト業が思うように出来なくて大変だと思った事もない」「課題は人それぞれなので一概には言えませんが、男女ともに子育て云々に関わらず、生活のため作家活動をやめる理由はたくさんあるように思います」などが代表的な意見である。男性も子育てに関わっており、人によって状況は全く異なる。ただ、きめ細やかにそれぞれの立場における課題を明らかにしていくことは、決して意味のないことではないと本調査を実施した。問題は、多様な立場にいる人を一絡げにして対処してしまうことだと考えている。

4. 最後に：子育て中のアーティストをどう支援していくか

子育て中のアーティストを支援していくため、その課題を明確にすることを目

的とした実態調査であるが、それぞれの制作スタイルや、家族の体制によって状況が異なり、一概には言えないことがよりわかる結果となった。しかし、少なくとも、本調査によって、それぞれのアーティストが「子育て」にかなり苦戦しながら制作しているリアルな状況を可視化することはできたのではないかと。数値的なデータとしてとりまとめるには不十分な結果となったが、調査によって明らかとなった鋭い指摘は、その言葉のまま資料として取り扱うことで、現状を伝える有効なデータとなるはずである。

また、今回の調査結果から、子育て中のアーティストたちを支援する方向性も見えてきた。それは次の2点である。

- (1) 収入を伴う活動の場を作る
- (2) 遠方や海外などグローバルな活動ができるサポートをする

(1) 収入を伴う活動の場を作る

今回の実態調査で、予想以上に、それぞれの地域に活動の場があることがわかった。アーティスト自身が活動場所を作り出しているケースもあった。子育て中の場合、遠方で活動することは負担のあることなので居住地域で活動場所を創出するべきだと考えてきたが、当事者たちも当然、同様に考え、そしてすでに行動していたということである。しかし、地域に活動場所はあるが「それだけでは食べていけない」という意見もあった。収入は活動を妨げる大きな要因になっている。アーティストが創作活動によって収入を得ることのできるシステムの構築が重要である。

(2) 遠方や海外などグローバルな活動 ができるサポートをする

子育て中の女性アーティストたちの多くはグローバルな活動をしたいと望んでいた。作品を制作することだけでなく、その作品を、あらゆる場所で、あらゆる人たちに見てもらいたいという思いは、アーティストならば当然のことだろう。

筆者が勤務する金沢 21 世紀美術館では、ここ数年、展覧会や公演のために長期滞在するアーティストやその家族、関係者が、小さい子ども連れて来る光景も見られるようになって来た。サポート体制までには至っていないものの、金沢 21 世紀美術館には託児ルームがあり、実際に利用されている。ただ、外国語対応までは至っておらず、また高額ではないにしろ有料である⁴⁾。子育て中のアーティ

ストの出品や出演契約の条件として、保育士のサポートや、利用できる一時保育の体制、滞在先ホテルの環境、保育料の支援などが当たり前になれば、活動しやすくなるアーティストも増えるに違いない。

最後に、本調査は、地域生活研究所の研究助成を受けて実施することができた。また、奈良女子大学の山崎明子准教授に調査指導をいただいた。深く感謝申し上げたい。調査結果は、NPO における子育て中の女性アーティスト支援活動に活用していく予定であるが、まずは、データをさらに整理し、より多くの方に、子育て中の女性アーティストの実態を知っていただくことに努めていきたい。

※本研究のアンケートの結果をまとめた資料編が地域生活研究所ウェブサイトに掲載されています。あわせて参照してください。

<http://www.chiikiseikatsu.org/kkjsrnbngiyu.html>



4) 2019年1月現在、1時間あたり500円から800円。相場から見れば高い金額ではないが、1日8時間預けると4,000円から6,400円かかる。当日だけでなく、打ち合わせや準備などでも利用することになると高額になる。ギャラと比較すると負担は大きく、たとえその場があっても預けることに躊躇するのも理解できる。ここでも収入の問題が関わってくる。